

卷頭言

今年一月二十一日、本会会長岸俊男先生が逝去された。本学会の設立準備に際しては準備委員代表として尽力され、また昭和五十四年三月三十一日の設立総会後は会長として本会の発展に努められた。その後の本会の順調な発展は岸先生のお力に負うところがきわめて大であった。昨年十二月の大会の当時は、すでに入院療養中で欠席され淋しい思いがした。その後約一ヶ月半にして先生の訃報に接することになったのはまことに残念であった。木簡学の今後の発展のためにも、いろいろ御指導いただけるものと思っていたところであるが、まだ六十六歳のお年で不帰の客となられたことは痛恨の極みである。

木簡学会が設立される以前に、奈良国立文化財研究所の主催による木簡研究集会が、昭和五十一・五十二年度の三カ年にわたって開催された。その第一回研究集会において、岸先生は「木簡研究の課題」と題して報告された。そこでは墨書のある木片についてばかりでなく、木簡状加工木片をも広く木簡として取扱い、併せ考察すべきこと、木簡出土の際の整理解説と発掘調査とをより有機的に関連させ、発掘状況を把握するとともに、それを発掘作業にも生かすこと、出土木簡の現状を正確に記録し、割截・折損の上、廃棄されたか否か等を的確に把握すべきこと、木簡の形状の詳細な観察と、その用途、さらには筆者の書風の問題を考え、また伴出する墨書土器についてもあわせて考察をすべきこと、中国の簡牘との比較検討をすべきこと、などを提言しておられるが、それは現在もなお木簡研究上留意しなければならない事柄である。

本会設立の目的は、会則第三条に「本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする」と書かれている。会員の方々には、各

地での木簡出土の情報を細大洩らさず委員会の方へお知らせいただきたい。本会設立に際して準備委員会で考えたことの一つは、木簡に関する情報をすべて蒐集して今後の研究に役立てうるようにならなければならないということである。それは委員会の手で出来ることではなく、全会員の積極的な姿勢がなければ不可能である。情報提供を一つの義務として考えていただきたいということであった。このことを今こと新しく言う必要はないかもしないが、一応ここに改めてお願ひをする次第である。本会会員に中世史を専攻する人は多くないようである。草戸千軒町遺跡出土の中世木簡はよく知られているが、仮名書きが多く、その釈読と内容の把握はなかなか容易ではない。類品が多い場合でもそうであるのに、まして数点しか出土していない場合には、その仮名の意味を正しく理解するのに苦しむことが多い。しかしその出土例が多くなるにつれて、その意味内容も少しずつ明確になってくる可能性がある。中世においても、制札を始めとして、木に文書を書くことは稀なことではなかった。紙に書くか、木に書くかは古代ばかりでなく、中世においても考えるべき問題である。したがって、中世木簡についても関心が深められ、発掘例の報告が増大することが切望される。

最後に話はそれるが、岸先生についての私の思い出を一つ書かせていただく。それは昭和三十六年一月下旬、平城宮跡において始めて木簡が出土したことである。その頃の事情については、田中琢氏「木簡第一号発見のころ」（『木簡研究』創刊号）に詳しいが、粉雪の舞う寒天下にノートを取っていた時、赤松俊秀・岸俊男両先生が来られ、いろいろ御意見をいただいた。始めての木簡出土の興奮に、寒さを忘れての作業であったが、その後も私は岸先生と木簡というとすぐにその時の情景が思い出される。最後になってしまったが、先生の御冥福を謹んでお祈りする次第である。

（田 中 稔）